2023年
6月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎４月の聖書日課（エゼキエル書、テサロニケ人への手紙第１）
◎土・日曜日の学び（十字架と復活）の感想です。

エゼキエルは祭司の子として生まれました。そして、その後南王国ユダもバビロンによって征服され、紀元前597年、エゼキエルもバビロンへ捕囚されました。そこはカルデヤ人の地でケバル川のほとりでした。捕囚民たちは、そこに住まわされたのです。捕囚の地での生活は大変で人々は希望を失い悲壮感が漂っていました。

エゼキエルは神からの問いかけによる幻をみます。骨が沢山転がっているのです。主は云われました。これらの骨を活き返らせる。すると骨に肉が付き、その上を皮膚が覆いました。そして、息である風を吹き付けると起き上がり、大集団となったのです。

これは、神様には全てがお見通しで、何でも出来ることを表しているのだと思います。神の御心に背いたため捕囚の身となりましたが、幻によって故国に帰る希望を見出すことが出来たのです。私たちには希望を生み出す力はありません。

しかし、主はそれがお出来になります。みことばが御霊と共に働くとき干からびた骨さえも生き返される神の奇跡がなされるのです。これは、死と復活、後にイエス様がなされる救いの「予表」なのかも知れません。

私は救いの「三段階」を理解出来ていませんでした。言葉では解ったつもりでいたのですが！
ロマ書６章で教えられたのです。この自分の死ぬべき「からだ」の中にはまだ罪が残っていると云うことです。

サタンはからだに、巧みに働きかけ、手、足、目、鼻、口、耳を通して罪を実行させます。このことは選民であるイスラエルの民が捕囚された原因を考えると、自ずから理解できます。

日常テレビで放映される事件は全てこの「死ぬべきからだ」に悪魔がささやきかけ、手、足、が実行するのです。これは、私個人にとっても、社会にとっても、国にとっても悲しむべきことです。聖化は、今、「工事中」であり、完全には成し遂げられていません。

からだの贖いがなされるのはイエス様が再臨された時で、この時、我々は栄光のからだに変えられるのです。この理解によっていろんな出来事が納得いくようになりました。

聖書は神のことばでありながら、なぜ、争いばかり続くのかと、・・神は「聖く」、「正しい」方であるゆえに絶対罪を受け入れません。罪を処罰されます。罪があったらいけないのです。

この神の特質に、聖さという面で人間はついてゆけないのです。しかし、「愛」ある神は御子をこの世に送り我々の罪の為に死んで下さいました。

我々は神の側からみて「義」とされ、神の子とされました。霊と魂（工事中）は救われましたが肝心の「からだ」は栄化を待たなければ救われません。悲しいことに、人間の欲望がからだの中に残っているのです。この悪魔の誘惑を、神の防具を用いて阻止しなければなりません。

実際には人間には「良心」があり、その良心が働き、みっともない、恥ずかしいまねはしないと思いますが、悪魔の働きがあるのは事実です。ダビデだって、ソロモンだって悪魔の誘惑には勝てませんでしたが、しかし、彼らは祈って、罪を詫び、悔い改めました。

思い出しましたが、同志社大学の創始者である新島襄先生は、講義をしている壇上で、悪いのは、この手なんだと云って自分の手を皆の前で激しく叩いたという意味がわかりました。

教会は病を癒やす「病院」だと私たちは考えていましたが、とんでもない「悪魔」という敵と戦う「兵営」であると、しかし、神の御霊によって新しく生まれた瞬間に我々クリスチャンは悪魔と戦う能力を受けると、ロイドジョンズは云ってます。ハレルヤ（畑中伸之）

彼らにこう言え。『わたしは生きている――【神】である主のことば――。わたしは決して悪しき者の死を喜ばない。悪しき者がその道から立ち返り、生きることを喜ぶ。立ち返れ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』」（**エゼキエル33:11**）

〈みことばを味わおう〉から励まされたことです。

過去どのように生きてきたかにとらわれず、「今日」という日に私はどうあるか、という問題です。私たちは絶えず、今を生きる存在として主の御前に在ります。そして主は、今日の私がどうあるのかに関心をおもちなのです。

まさに「今日もし御声を聞くならあなたがたの心を頑なにしてはならない」（**詩95:7-8**）とある通りです。主はつまずき倒れそうな者の「右の手をしっかりとつかんでくださいます。」（**詩73:23**）

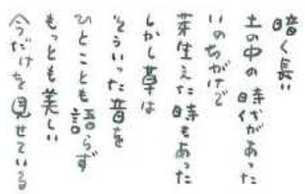
主の御名を呼びつつ一歩、一歩と歩んでおります。感謝がつきません。そして主に在る兄姉方との年齢を超えた交わりによって、とても励まされております。主よ感謝します。（福島三弥子）

一年の中で一番命の活力を強く感じる日々です。茶色一色だった庭が、緑の葉ととりどりの花に埋め尽くされています。

こんな時でも銃声に怯えたり、地震で家が倒壊したりと困難に遭遇している人々がいます。自分もいつこのようになるか、分かりませんが、どんな事態におかれても、主への信仰を守れるように助けて下

さいと、祈ります。
　礼拝に皆勤だとしても、ただ習慣で出ているとしたら、意味がありません。主の前に出て自分自身を点検して、傷ついた所を回復して頂くのを願うことを、教えられました。
　怖いのは自分の傷に気がつかない事だとありました。知らずに神様に背を向けている事がないか、主にいつも働いて頂けるように、お願いします。自分で頑張るのは止めようと改めて思い知らされました。
　（69頁のみことばを味わおう）より　（広瀬裕子）

それゆえ、イスラエルの家に言え。神である主はこう言われる。イスラエルの家よ。わたしが事を行うのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った国々の間であなたがたが汚した、わたしの聖なる名のためである。」（**エゼキエル36:22**）
　主はイスラエルの復興を通して、ご自身が聖であること、全知全能で歴史・世界を支配する神であることをかつてお示しになり、さらにこれからもお示しになるのだと思います。
　単にイスラエルの家を救うのではなく、それを見る世界が主を知るためです。現代の世はますます混沌として先行き不安な要素が増えた気がしますが、全ては主のご支配の中で起こっていることを忘れずにいたいです。
　不安といえばこの1年、家の住み替え、高校受験、卒業対策委員などいろいろなことが重なり、当初は夜中に目が覚めて、次々に膨らむ不安や心配事を思い巡らしたりした時もありました。
　しかし、福島兄弟からもらった「あなたの重荷を主にゆだねよ。主があなたを支えて下さる」（**詩55:22**）のカレンダーの写真を見ながら、祈り、前に進む心を奮い立たせて頂き、主から与えられる活力に感謝しながらの生活でした。
　主が共にいて下さる、支えて下さるとは本当に素晴らしい恵みなのに、忘れがちです。不安に打ち勝つために、つい自衛に走り、自分で自分を奮い立たせようとしますが、それはすぐにエネルギー切れになります。
　自分に頼らず主にすがることで不安と縁を切ることができ、付加的にこの世に生きる活力をも恵んで頂き、生き生きと生活できるような気がしています。それが神の国をこの世に表す一助となればと思います。（永井亮子）



星野富弘詩画集より

私たちはキリストに結合されたことによって、罪の支配する領域から、キリストの支配の領域に入れられました。それを「認めなさい、思い定めなさい、」と。まずはそれをしっかりと思い定めることが大切なようです。
　そのうえで、「私」と「体の中の罪」を区別することも明らかにしていてくださいます。（ロイドジョンズ著ロマ書講解6章P.155,171参照、ロマ7章20節にはその区別が感じられますが、それをはっきりと書いていてくれてます）
　さらに、「私」が「体の中の罪」に対して抵抗することを、励ましていてくださいます。それは、「信じて信仰によって義とされ、神の御霊によって新しく生まれた瞬間に、その（抵抗する）ための能力を受けるからである。だから、聖書はこの真理を思い起こさせたうえで、『それでは、行って実行するがいい』というのである」。
　なんと、「私」はそのための能力さえ受けていると言います。なんと心強いことでしょうか。であれば、「私」は「体の中の罪」に対して抵抗できるはずです。このようにしっかりとひも解いてくださったことを感謝します。（高橋美枝）

あなたがたが主に結ばれてしっかりと立っている限り、<u>私たちは、今、まさに生きていると実感するからです</u>。」（**Ⅰテサロニケ3:8**）
　今までの私は、主に堅く結びつくために感謝を込め、朝と晩の二度、主との交わりを持ちたくディボーションを行っています。
　一人で暮らしていると、何かいいかげんにしていると、主との結びつきが薄れる気がして不安なことがあります。本当に私たちの声、祈りが届いているものかと。
　私たちが主に心を向け、主に助けを求める時、主が私たちを助け、守り、いのちの実を結ばせてくださいます。
　「私たちの主イエスが、ご自分に属する聖なる人々を伴って再臨なさる時、あなたがたが、聖なるものとしてとがめられるところなく、私たちの父である神のみ前に立つことができますように。」（**3:13**）
　世界各地で戦争や飢餓に苦しむ方々が沢山おられます。主イエスに結ばれた者として、神に喜んでいただくため、どのように歩まなければならないか、しっかり信仰を通して学びたいと思います。これは神がお望みのことですね。（木村邦夫）

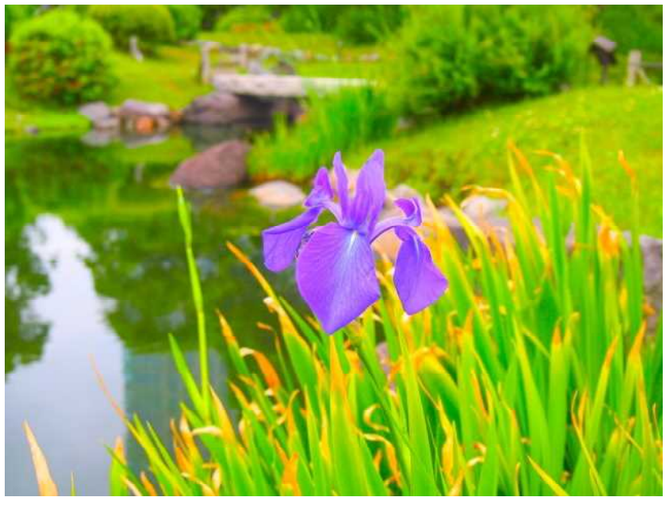
神に愛されている兄弟たち。私たちは、あなたがたが神に選ばれていることを知っています。」
（**Ⅰテサロニケ1:4～6**）
　使徒パウロはこのように語っています。自分は、ちっぽけな存在だと卑下することは、神に愛されているのに、申し訳ないことです。
　順調な時も、また、逆境な折でも、いつも神は、私と共にいてくださいます。聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、主に倣う者になりたいと願います。（外處トミ）

小さいと　見えるけれども　主の目には
大切な者　高価で尊い
2023年4月30日

群馬県水上町の水仙

主は、私たちの罪過のために死に渡され、私たちが義とされるために、よみがえらされたのである。」
（ロマ4:25）

罪人である私たちのために、罪のないイエス様は手を差し伸べるどころか命さえ差し出してくださいました。なんという恵みでしょうか。日々心に留めて歩みたいです。（外處光歩）



あなたがたの互いに対する愛を、またすべての人に対する愛を、主が豊かにし、あふれさせてくださいますように。」（Ⅰテサロニケ3:12）

この世にはいろいろな人がいて、全ての人が自分の好みに合うわけではありません。

自分の好みは自分の古い自我から出てくるのですから、選り好みをしてしまうことになります。

そのため、自分の好みで無い人を疎(うと)んじてしまったらきりがなく、それは自分の世界を自ら苦しいものとし、心を無駄に苦しめてしまうことになります。

好みでない人を自分の力で愛することは難しいことですが、神様からいただいた愛によって、どんな人をも神様に造られた人として愛おしく思うことができるようになるのだと思います。

愛が足りない自分に気が付いたら、まず、こんな自分をも神様は愛してくださっている驚くべき恵みに気がつく必要があります。

私たちの心の思いの源泉がいつも神様の愛でありますように。（外處徳昭）

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。」（Ⅰテサロニケ2:19）

ユダヤ人たちの暴動により、不本意ながらテサロニケの地を後にしたパウロたちは、一度ならずテサロニケ再訪を計画したようです。しかし、それは実現には至りませんでした。パウロはその原因を、「サタンが私たちを妨げたのです」（18節）と述べています。

そのような困難にもかかわらず、パウロは落胆していません。打開できない情況の中にありながら、彼らは感謝を抱き続けています。

「私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。あなたがたこそ私たちの誉れであり、また喜びなのです。」（19-20節）

ここに私たちは、再会の交わりを望みつつも、この地上でその願いが十分に果たされないキリスト者の慰めと励ましの原則を見ます。「会うは別れの初め」というあきらめではなく、希望のある慰めです。

慰めの第１は、キリスト者の交わりは、たとい直接顔を合わせられなくても、心においてはしっかり結び合わされていることです（17節）。

そして、私たちには祈りの交わりという賜物が授けられています。祈りを通して、全世界のまだ会ったことのない兄弟姉妹とも豊かな交わりを持つことができます。

その意味でも、教会ほど年齢、職業、生活において多種多様な人々が集まっていながら、目的においても価値観においても一致している集まりは他に類を見ません。

それは、聖書、信仰、祈り、聖霊の働きという共通の土台が与えられているからです。場所は離れていても、常に主にあって心は一つにされているのが神の民の群れなのです。

慰めの第２は、主イエスは再びこの地上に来られる時、必ず再会できるという約束があるからです（19節）。

地上での別れは、御国での永遠の再会に比べれば、しばしの期間の別れにしかすぎません。私は、これまでにお世話になった何人もの宣教師たちの見送りで、「天国で、またお会いしましょう」というさわやかな表情が印象深く残っています。

キリスト者にとって、地上の別れは悲しみを残すだけのものではなく、天の御国での再会を待つ希望の別れでもあります。

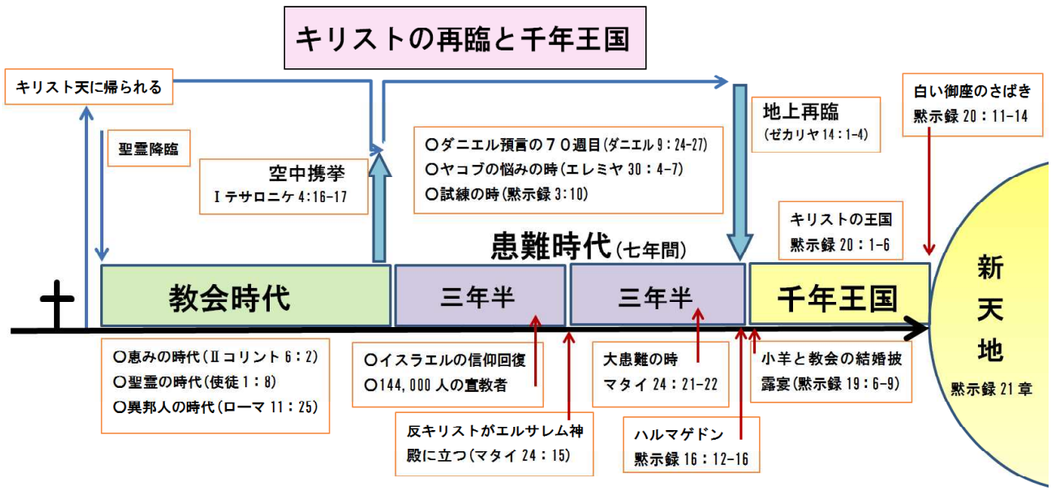
パウロはここで初めて、「再び来られる（πάρουσία（パルーシア））」というギリシャ語を用いています。パルーシアは、新約聖書で24回用いられておりますが、これは、特に王や高官の正式訪問の時に使われる言葉です。ここでキリストの再臨を指しています。王なる栄光のキリストを喜びひれ伏してお迎えするのが私たちキリスト者たちです。

その時、御前で、望み、喜び、誇りのしるしとしてパウロたちが主から与えられる勝利の冠は、愛するテサロニケ教会そのものです。

パウロたちが患難にめげず従事した伝道の実は、終わりの日に豊かに結んで、喜びと誇りを持って主に差し出す冠となるのです。

「あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」（Ⅱテモテ4:8）

私たちも再臨の日に空手で主をお迎えすることがないよう、主のわざに熱心に励む者でありたいですね。（福島勲）



貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ５月号の感想を６月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）